いずみ

第一号

狛江第一小学校

いずみ

才一号

道

寒くたって負けるもんか、
氷が張ってたって、風が吹いてきたってさ。
この道を歩いていこうよ。
あそこに日だまりだってあるよ、ほら。
遠い道のりだけど、
かけたり、とことこ歩いたりして……ね。
みんなで。
どっし、どっしとさ。
ぼくのほゝはまっかだよ。

狛江第一小学校国語研究部編集

いずみ第一号もくじ

文集「いずみ」を出すについて

狛江第一小学校長
高橋　義彦

このたび皆さんの文集「いずみ」第一号が生れましたことはまことに喜びにたえません。これからの世の中では、自分の意見をいったり、文に書いたりすることが非常に大切なことであります。それで話しかたや、作文が大切にされるようになったのであります。作文は皆さんの見たこと、聞いたこと、考えたこと、感じたことを文に書きあらわすことで、たくさんの人たちに自分の意見をわかってもらい、また、人の文を読んで、その人のきもちをあじわって見ることができ、また、何年も後の世までこれを残すことができるという人間の文化生活にとって、たいへん大切なしごとなのであります。

また、文を書くときには、だれでも、しんけんに考えながら書くものですから文をたくさん書くことによって、しらずしらずのうちに、ものごとにたいする正しい見かた、正しい考えかたが養われるものであります。

この文集「いずみ」がたくさんの皆さんに読まれて、そしてお友だちの生活のようすやものの考えかたや、感じかたをおたがいに知りあって、皆さんの心は大きくふくらんでいくようにと願っています。

1ねん

おべんとうの日

すずき　えみ子

きょうはおべんとうのある日です。わたくしは、おべんとうがだいすきです。わたくしは、おべんとうをたべるときにこにこしてたべます。先生がおゆをつぎにくるときも、にこにこしてたべます。はじめてのおべんとうの日、先生がおゆをつぎにきたらはずかしくなってしまいました。そしておともだちとかおをみあわせると、おかしくなってしまいました。

がくげいかいのこと

しもせ　じろう

ぼくはがくげいかいのときおかあさんたちがみにきてくれた日のことをかきます。あかずきんちゃんのげきのときかりゅうどがでてきますそれでぼくと、いさむくんと、なまえのしらないひとと三人でそうだそうだって、てをたたきます。二かいたたきます。ぼくはレコードでことばをいうのにぼくはくちでそうだそうだといいました。そのはなしをうえまつさんにはなしました。そしたらうえまつさんが、ばかみたいといいました。

ひなまつりのこと

いしはら　かず子

きょうはひなまつりです。よる、おかあさんがおいしいごちそうをつくってくれました。そのおいしいごちそうは、おいなりさんでした。みんな、おいしい、おいしいといってたべました。そのあと、おかあさんがさいだーをもってきてくれました。もってきたさいだーをみんなでなかよくわけてのみました。それがおわったら、うたをうたいました。おとうさんが、それんそれんをうたいました。こんどうおにいちゃんが、おとみさんのうたをうたいました。

いぬ

すがや ひろし

うちのいぬはしばけんです。いろはちゃいろにうすちゃいろをまぜたいろです。なまえはめりーというなまえです。めりーははなすと、なかなかかえってきません。よる、とをしめるときよんでみました。だけどなかなかかえってきません。あくるあさみてみると、ちゃんといぬごやでまるくなっています。ぼくがめりーをおこしてしまおうとしたとき、くんくんとねごとでほえていました。ぼくはびっくりしました。めりーはごはんをのこします。そして、よるほかのいぬがたべにくると、けんかをします。めりーはこのまえ、せんたくものをばけつをひっくりかえしました。おかあさんはかんかんにおこってしまいました。めりーはしもよけの上にのってあさまでねていたので、おかあさんはまた、かんかんにおこってしまいました。めりーはきげんのわるい日はすみやさんにかみついたり、おおぎやさんにかみついたりしています。めりーは、いぬのおいしゃさんがくると、いやがってこまります。

お正月

おがわ はるこ

お正月のあさはおぞうにをたべます。たいへんいそがしくなります。とこのまえにかがみもちをかざります。お正月のあさはたのしい。そとで、げんきにはねつきやたこあげをしてあそびます。おかあさまはいそがしい。あさはやくおきます。おぞうにはおいしい。うちのにわはせまいから、はねつきはできないのですよ。だから、ちかくのひろばであそぶのよ。おとなりのてしまさんとおとうとのよしひろちゃんとかるたをしたの。それからすごろくもしたのよ。

いぬ

いけたに かな子

うちのいぬはろんといいます。もらってきたときは、小さくておにわのかだんをあらしたり、げたをくわえたりしましたが、いまではすっかりおとなになって二月一日あかちゃんをうみました。小いぬは、三びきでちゃいろと、くろと、こげちゃいろです。うまれたときはもぐ

らみたいに目をつぶっていました。けれど、このあいだから目があいて、よたよたあるくようになりました。ろんは、まい日小いぬのからだをぺろぺろなめています。

でんしょばとの子ども

おがわ みつじ

おばあちゃまのうちのぶらんこの上にくらくなってから、はとがいたので、おばあちゃまがおにいさんにおしえてくださいました。おにいさんとぼくは、ふたありでかけていきました。そうしてかけていったらのるものがないといってまたうちへかけてかえりました。まるいすをもちだしてまたかけていきました。おばあちゃまのうちにつくと、おばあちゃまのうちのあみでとりました。ぼくははじめとれるかとおもってびくびくしました。ぼくははとがあみの中にはいったので、にこにこしましたおばあちゃまもよかったといっていました。うちへもってかえると、おかあさんが、まあきれいなはとね、とおっしゃいました。おかあさんは、はやくなにかの中にいれてやらないとかわいそうですよ、とぼくにおっしゃいました。うん、そうだと、ぼくはおかあさんにはいちょうのふるいのをいただいて、しんぶんがみをいれておきました。はとは、あさのみや、とうもろこしやこむぎなどをたべます。どこかのはとでしょう、と、しんぶんしゃのおじさんがでんわをかけました。ぼくは、はとをどこかの人がとりにこなければいいなあとおもいました。はじめはぴいぴいないていたのが、このごろぐうぐうなきだしました。

おべんとう

たけい しほみ

わたくしはおべんとうのある日はとてもすきです。あしたがおべんとうという日は、おかあさんにおべんとうのおかずをたのみます。いちばん大すきなのは、いりたまごです。それからうでたのや、やいたのもすきです。おさかなもおべんとうにいれてもらいます。おさかなはまぐろのきりみをしおやきにしたのが大すきです。そのほかにも、のりやふらいや、てんぷらなどもいれてもらいます。そして、おべんとうのじかんがたのしくて、まちどおしいです。おともだちといっしょにたべるごはんはとてもおいしいです。だから、わたくしはおべんとう

のある日はすきです。

せつぶん

池端規益

土ようのよる、まめまきをしました。いちばんにまいたのはおとうさんで、ぼくが二ばんめにまきました。いっぱいまいたので、「もうやめよう」といいました。ぼくはすぐ、げんかんのとをしめました。あとから、おかあさんが、「もうまいたの」といいました。ぼくが「もうまいたよ」といいました。あとからおふろにはいるとき、ぼくがおふろばにまめをまきました。それから、とてもさむいので、いそいであったまってから、さっきのまめをさがしました。「あ、こんなところにあったのか」とおもって手にもったら、まめがこまかくわれていました。

うちのねこ

ふじい　みつ子

わたくしはねこを二ひきもらってきました。一ぴきのねこは、ぎょうぎがわるいので、かえしてきました。一ぴきのねこは、ぎょうぎがいいので、かわいがってそだてていました。あるひ、うちのおかあさんがふとんをあげているときふとんのところにねていて、おなかをおかあさんにふまれました。そうしてわたくしたちがともだちといじくっているうちに、しんでしまいました。ほんとうにかわいそうなことをしたとおもっています。

うちのいぬ

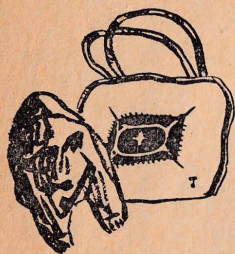
おかもと　むねひさ

うちのいちばんはじめのいぬは、ぽりといいましたが、そのいぬがいなくなったので、そのいぬのおとうとをもらいました。そのいぬは、くろといいます。そのくろは人がくると、すぐじゃれつきます。ぼくがおふろばへいくときでも、さんぽにつれていってくれるかとおもって、すぐぼくのまえにきてじゃれつきます。ぼくがそとへいくときも、さんぽにつれていってくれるかとおもってすぐじゃれつきます。

ぼくは、くろがだいすきです。

うちのじゅうしまつ

こだま　ゆきお

うちのじゅうしまつはせわがたいへんです。じゅうしまつは二ひきいます。ねるときは、ふろしきをかぶせてやります。すると、とりごやの中のすにはいってねます。よるははやくねて、あさははやくおきます。あさ、ふろしきをとって、えさをふいてやります。みずをこぼしてとりかえてやります。ぼくはじゅうしまつが、大すきです。ぼくはじゅうしまつをかわいがってそだてていこうとおもいます。

2ねん

わたくしはねこです

みのわ　すみえ

わたくしは、まい日、にんげんのねどこにねかせてもらっています。よるになると、にんげんはわたくしをつかまえにきます。わたくしは、いやなときは、にげたりかくれたりして、みつからないようにしています。にんげんにだかれたときは、しらんかおをしています。そうすると、だいていっておふとんの中に入れてだいてねます。わたくしは、きゅうくつでいやになると、そのこのおふとんからはい出します。どうしてもにげられないときは、じっとしています。そうしてあさになると、わたくしは、ここのうちのおばさんにごはんをもらってたべます。わたくしは、ひるまはおもてであそんでいて、ごはんがたべたくなると、うちの中に入っていって、ごはんをたべます。かえってこないで、よるまであそんでいるときもあります。ここのうちの人は、わたくしのくびに、すずをぶらさげてくれました。わたくしはうれしくなりました。ときどき、ここのうちのぼうやが、いじめ

るときもあります。そういうときは、つらいけどじっとがまんしています。そうしてしばらくたつと、はなしてくれます。ここのうちのおんなの子は、とてもすきですどうして、というと、とてもわたくしをかわいがってくれるからです。このあいだぼうやがすずをとってしまったので、ここのうちのおんなの子がまたすずをつけてくれました。このあいだ、ぼうやがはじめてなでてくれたので、わたくしはのどをならして、よろこびました。それから、おとこの子はずっと、かわいがってくれるようになりました。おんなの子は、いつもかわいがってくれています。

おるすばん

いとう　ようこ

学校からかえると、おかあさんが、「びょういんにいってくるから、るすばんしてね」「はい、おかあさん、なん時ごろかえってくるの」「そうね、一時ごろにかえってくるわ、いってくるわね」「いってらっしゃい」

わたくしは、おかあさんがいってしまうと、きゅうにさびしくなりました。わたくしは、おとなりのきみ子さんのうちへよびに行きました。「きみ子さん」「はあい」きみ子さんが出てきました。「ねえ、わたくしのうちへきてぬりえしない」「ええ、しましょう」「わたくし、おるすばんなのよ」「ちょっとまってて、きいてくるから」きみ子さんのうちからたけやぶが見えます。

「いいって」「それでは、うちへいきましょう」「ええ」

わたくしのうちには、いぬがいます。クンクン、いぬもなきました。「あがりなさいよ」「ええ」「ぬりえをしてあそびましょう」「わたくしはこれがいいわ」「わたしはこれよ。」二人はいいのをとりました。しばらくぬりえをしてあそんでいると、「ただいま」「おかえりなさい」「あら、おばさん、こんにちわ」「まあ、きみ子ちゃんもきていたの」おかあさんはにこにこしながらいいました。「これ、おるすばんのごほうびよ」。わたくしは、おかあさんにいただいたおかしをきみ子さんにもわけてあげました。

わたくしはお人形です

竹内　しげり

きょうはあめです。わたくしのすんでいるうちの女の

子は、めぐみちゃんといいます。めぐみちゃんがきょうわたくしをつかってくれました。わたくしは、お人形ごっこのうちの子どもになりました。めぐみちゃんは、わたくしのことを、みち子とつけました。

「みち子ちゃん、きょうはあめねえ」と、めぐみちゃんがいいました。わたくしは、くちがきけないからだまっていました。そのかわりにめぐみちゃんが、「そうねえ」と、いってくれました。わたくしはふとんにねかされました。そして、めぐみちゃんが、じょうずに「ねんねんよう」と、うたってくれました。わたくしは、ねむったようなふりをしていましたが、お人形ですから、ねむれません。そして、ほんとうのよるがきました。わたくしは、めぐみちゃんとねました。めぐみちゃんは、また「ねんねんよう」と、うたってくれました。わたくしはねました。この家にめぐみちゃんときょうだいの男の子がいます。それは、よしおくんです。よしおくんは、とてもいたずらで、わたくしをいじめました。わたくしはかなしくなりました。そうしたら、めぐみちゃんが、なぐさめてくれました。

あさごはんがすむと、みんな学校に行ってしまいました。わたくしは、おばさんと二人きりになりました。

わたくしはさびしくなりました。

正彦ちゃんの一日

林　武彦

ぼくのおとうとの正彦ちゃんぼ、まだあかちゃんで、いまつたいあるきをしています。

ぼくが、あさおきると、正彦ちゃんもたいてい目をさまして「ボブ、ボブ」とないて、おとうさんやおかあさんをよびます。すぐおとうさんが来て、あまどをあけます。あけているまに、おかあさんが来て「正彦ちゃん、おきたの、とっと」といってしたうちをします。

もう、朝夕さむいので、まい日おぶっておかってをします。ぼくがおかってにはをみがきにいくと「ニジャ、ニジャ」といって、ぼくをよびます。ぼくは「なんだい正ちゃん」とへんじをします。正彦ちゃんは「ポポ、ポポ」とわらいます。ぼくたちがごはんをたべるときは、しょくたくいすにのってぶらんぶらんと、しょくたくいすをゆらせてあそんだり、いすにすわっておもちゃであそんだりします。しばらくすると正彦ちゃんもおなかがすいたのか、「ププ、うまうま」といいます。おかあさんは「おなかがすいたの。よしよし、いまこんろをひねってくるわよ。」といって、おかってへこんろをひねり

に行きます。そして「いま、うまうま作りにいったわよ」といいます。おもちゃばかり下におとして「じゃちゃぱ」といって、ぼくにとってもらいます。おわりのほうになると、正彦ちゃんもあきて「バウン、バウト」とおこってしょくたくいすをけとばしながらなきます。「しょうないな、正彦は」とおとうさんはいってだっこしてたべます。ようやくぼくたちのごはんがおわると、正彦ちゃんのうまうまが「ぶつぶつ」と音を立ててでき上がります。おかあさんは「正彦ちゃん、うまうまですよ」といいます。また、正彦ちゃんのうまうまがひとくろうですようやくたべおわると、はなやほっぺたにうまうまをくっつけています。

　ぼくが学校に行くとき、正彦ちゃんはおかあさんにだっこされて、ようまのガラスからぼくをみつめながら、わらっています。ぼくが「正彦ちゃん、いってまいります」といって手をふると、正彦ちゃんもおかあさんに手をもってもらって手をふっています。学校からかえって来ると、たいていようまで、うまうまをたべながら、にこにこしてじぶんも「うまうま」といいながらたべています。「正彦ちゃん」というと、キョロ、キョロしてあっちこっちを見ているまに、とうとうぼくを見つけて「キャッ、キャッ」といって大よろこび。うまうまをたべるとたいていねます。

　夕がたごろまでぐっすりねむるので、ぼくはそのあいだにしゅくだいをします。ときどき、夕がたぐずるのでぼくがおんぶして、ねかせます。よる、おとうさんもいるので、みんなであそびます。おとうさんが「おいちにおいちに」といって手をつかまらしてあんよをさせますぼくがだっこすると、きらいなのか「ウウン、ウウン」となきごえを出すので「うるさいな」とぼくがいうと、おとうさんたちは「はっはは正彦はおにいちゃまがきらいらしいな」といいます。

　おとうさんとおかあさんとどっちへ行くかをためして見ると、ずっとまえはおとうさんのほうへ行きましたがこのごろはおっぱいのにおいがわかったのか、おかあさんのところへ行きます。ぼくがよるねるころ、正彦ちゃんもぎゅうにゅうをのんでねむります。

ひっこし

細野すみえ

わたくしのおうちは、ほんとうは、二月二十九日ひっこしなのでしたが、まだ、かきねや、ガラスや、いろいろなおしごとがあるので、三月一日にしました。こんど入るおうちは、今のおうちのとなりです。わたくしのおうちでは、おひっこしする前の日、おにもつをかたづけました。わたくしは、大きな本ばこや、わたくしのおもちゃばこや、いろいろなものをはこんだのでくたびれてしまいました。つぎの日、わたくしのおうちでは、ひっこしです。おかあさんや、おとうさんは、わたくしが学校へいっているあいだ、たんすや、ミシンだの、大きいものは、みんなはこんでしまいました。わたくしも、小さいものをたくさんはこびました。みんなくたびれてしまいました。ここのおうちは、おふろがないので、前のおうちのおふろにはいりました。おかあさんは、おふろにはいりながら、「ここのおうちともおわかれね。」といいました。でてから、あたらしく入ったおうちで、ねました。はじめてのおうちなので、わたくしは、ゆめを見てしまいました。まどのところに、くろいものがうつっていて、男の人と、おとうとがいて、そのおとうとが、つれていかれるようなゆめでした。あさになりました。おうちの中をみんなでかたづけはじめました。わたくしは、じぶんのものをかたづけながら、まどからときどきもとのおうちを見ました。

雨の日

天野朋子

　雨の日はつまらない。外であそべないからだ。それにきょうしつが、おしゃべりばかりでうるさい。おてだまの音もうたもきこえる。ストーブのそばでは、男の子がむちゅうになってストーブをたいている。いがらし君がもってきた、すもうゲームにかたまっている子もいる。雨の日はなんとなくへんなきもちがする。雨のふっている中でも、あそんでいる子もいる。おとこの子と、おいかけっこをしている子もいる。おりこうな子になると、二れいがなると、おしゃべりをしないでべんきょうをする子もいる。先生のつくえのうしろに立って、べんきょうをしてください、といっている子もいる。おてあらいにいく子はたくさんいる。りかをやらないで、ほかのべんきょうをしている子もいる。

　これが、雨の日の先生がくるまでのみんなのようすなのだ。

× × × × × ×

おとうさま

高木克枝

おとうさまは、かぞえ年四十才です。東京電力江戸川し社につとめています。大へんとおいので、朝は六時五十分の電車にのって行きます。おとうさまは朝ねうぼが大すきですが、おつとめのときはわたくしがねているうちにおきてしまいます。そのかわり、日よう日は、一ばんおそくまでねているので、おかあさまはいつまでもかたずかないのでこまってしまいます。

朝のごはんも十時ごろになってしまうので、わたくしはおなかがペコペコになってしまいます。お天気の日には、きっとせいじょうの山の方へさんぽにつれていって下さいます。

日よう日には、さんぽをしたり、おふろのまきをつくったりするのが、おとうさまの一日のしごとです。げっきゅう日には、いつもわたくしやいもうとのすきなおかしをかって来て下さいます。おとうさまが会社からかえると、家の中が、きゅうににぎやかになります。

わたくしは日よう日が一番たのしみです。

うちのこぞう

橋本誠一

うちのねこはこぞうといいます。ぼくがよんでもこないのに、あんちゃんがよぶとすぐきます。だからこぞうをぼくがぶつと、あんちゃんがおこってかかってきます。このあいだも夕はんのとき、こぞうがあんちゃんのさかなをたべましたが、あんちゃんはおこりませんでした。

こぞうはぼくのさかなをたべようとしたので、ぼくはこぞうをおこりました。するとあんちゃんが、ぼくのことをなぐったので、ぼくはないてしまいました。かあちゃんが、「なんでぶったんです。」と、あんちゃんにおこりました。あんちゃんが、「せいぼうがこぞうをいじめたからぶったんだ。」といって、にげていってしまいました。こぞうが、「ニャァゴ、ニャァゴ。」とないたので、ぼくがおこって、「あっちへいけ。」というと、こぞうは、いってしまいました。きのうのよる、ふとんの中でねていると、こぞうがむこうのへやからきたので、「こっちへこい。」といいましたが、こぞうはぼくが、いつもいじめてるので、きませんでした。あんちゃんがよぶと、「ニャゴニャゴ。」となきながら、いきました

ぼくはとてもつまらなかったので、こんとはこぞうをいじめないようにしようとおもっています。

お正月

岩崎哲

たのしい、たのしいお正月が来ました。ぼくは、おねえさんとおにいさんと、みんなではねつきをしてあそびました。一時に狛江のえきに行きました。えきには七人のおともだちがまっていました。あとから先生がいらっしゃったので、みんなで電車にのりました。まどから、外を見ると、やっこだこやえだこ、じだこが空高く上っていました。電車の中は、こんでいるので、空気がむっとしています。まもなくさくらじょうすいにつきました。いろいろな電車にのりかえて先生の家につきました。おかきぞめのあとで、トランプをしてあそびましたが、六時になったので、先生の家を出ました。とてもたのしい一日でした。家にかえって、おかあさんにきょうのことをはなしました。

冬休み

西山節子

冬休みには、わたくしとおにいさんと、おかあさんと三人で、すがものおじぞうさまへ行きました。すがもには、いろいろな、かざりや、おせんこうをうっているおみせがありました。おかあさんは、おせんこうを、一わかいました。そのおせんこうを、火のもえているところに入れました。おせんこうのけむりは、においをたててひろがりました。おがんでから電車にのってかえり道に明治じんぐうへよりました。わたくしには、しらゆきひめの本をかってくださいました。おにいさんは、まんがの本をかいました。それからやりをかってかえりました。

お正月

鈴木敏子

お正月の三日、みんなでめいじじんぐうへおまいりにいきました。電車を、おりていくと、いろいろなおみせ

屋がいっぱいです。それにじどう車がいっぱいとおっています。わたくしはあぶないので、ねえちゃんの手をしっかりにぎっていました。そしてやっと、めいじじんぐうへつきました。

　わたくしは、こうおがみました。

ことしもたのしくくらせるように………

かえりに門のところで、よこづなのとちにしきがおまいりにきたところにあいました。それからみんなで、かけっこをしました。わたくしは、いつもまけているのでこんどこそかとうと思いましたがついに三とうになってしまいました。

　それからタクシーでしんじゅくへいきました。ずいぶん早かったのでびっくりしてしまいました。それから中村屋でかいものをしました。それからおとうさんとわかれてかえってきました。ほんとうにしあわせだと思いました。

うめの木

三輪直子

わたくしは花がすきです。うちにうめの木があります

　うちの花はもうはんぶんぐらいさいています。わたくしは、いつもいつも学校からかえると、うめの花を見ます。わたくしが見るたびにいっぺんにさいていつまでもちらなければいいなあと思います。だけど早くうめぼしをたべたくてしょうがありません。わたくしはうめの木のことを思いだすといつもおかあさんにうめぼしをおねだりします。このまえまで三ぶんの一しかさいていませんでした。いつも四つでも多くさくとおかあさんが、

「直子うめの花がさきましたよ。」

というのでわたくしはとんでいきます。このまえうめの木にさおをかけておくと、にいちゃんのセーターがひっかかってしまいました。にいちゃんがそれを見るとうめの木にのぼってとろうとしました。なかなかとれません。わたくしは、

「にいちゃんしっかり。」

というとにいちゃんはくるしそうに

「だいじょうぶだよ。」

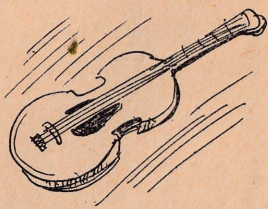
と、いいました。おかあさんが、

「じぶんのきているようふくが、きれるからよしなさい。」

と、いいました。そのときにいちゃんはもうじぶんのセーターにつかまって、いました。にいちゃんは木からおりました。そのとき木のえだがおれてしまいました。にいちゃんが

「あっ、いたい。」

と、いいました。わたくしは、せっかく花がさいたのにと思ってがっかりしました。でもかれないで花がさいたから、よかったと、思いました。

3年

たこあげ

宮田一夫

　きょう、たこをあげました。さいしょ風がないので、とびませんでした。だんだん風がふいてきました。ぼくはどんどん糸をだしました。電しん柱からうんとはなれてとばしました。きゅうに糸をのばすと、おちそうになりました。どんどん糸をひくと、やっと高くあがりました。てんじょうたこになったので、ちゅうしんをなおしました。しっぽがへんになったので、なおしました。

　やっともとどおりにできたので、またとばしました。おひるになったのでごはんをたべて、またとばしました。

こおり

斎藤千雪

　朝おきたら、バケツにこおりがはっていました。わろうとしてさわったら、とてもかたくてわれないから、学校から帰ったらわろうと思った。朝ごはんをたべてから家を出て、電車にのったら、いつもは電車の中にスチームがはいっているのに、きょうははいっていませんでした。学校についたら、バケツにこおりがはっていたので家と同じだなあ、と思いました。

　おかえりになって、えきについたら、ちょうど電車が来たので、のりました。東いく田で小学生の人がのってきました。家へかえって、バケツを見たら、もう、こおりはとけて水になっていました。

うめ

川茂夫

ぼくは、いもうとのしず子と、
パンを買いにいった。
すると、しずこが、
「もう春だね」といった。
ぼくは、
「なぜわかった」ときいた。
すると、
「うめの花がさいてるよ」といった。
うめの花がきれいだった。
白や、赤の色だった。
ぼくは心の中で、
「この木に、うぐいすがいたらいいな」と、
思った。

わたしのおかあさん

岡本みち子

わたくしのおかあさんは、朝ねぼうでこまります。だから、夜ねるとき、「あした、だれでもいいから起こしてね」といってねます。朝おこすと、「みち子、おきなさい、かみをとく時間があるからね」といってゆすぶりおこしてくれます。わたくしも朝ねぼうなので、すぐおきます。

おかあさんは、ごはんもろくにたべないでわたくしたちのめんどうをみてくれます。わたくしたちが学校や会社に行くと、あとはおとうとやいもうとばかりで、じゃまになるので外へ出してからおそうじをするそうです。

雨がふると、外へ出せないので、家の中でぞうきんがけやふきそうじをさせて手つだいをさせるそうです。わたくしは学校へ行ってしまうので、わかりませんでしたが学校から帰っておかあさんに聞きました。それからお昼ごはんをたべて勉強してから、わたくしのおとうとやいもうと、近所のお友だちとおにごっこをしてあそびました。夕方ちかくにおかあさんが、きゅうにねつをだしたので、夜ごはんはわたくしが作ることになりました。おかずはサラダなので、じゃがいもの皮をむいてきりました。つぎは人じんをきってじゃがいもと一しょにゆでました。ゆでてから、マヨネーズを入れてかきまぜている所へ、おとうさんが会社から帰って来て、「ほう、きょうはみち子が作ってあしたは雨がふるんじゃないかな」と、じょうだんを言いました。それから、ごはんをたいて、みんなでたべました。

ふとんをしいてねまきにきかえてねました。

おかあさんが、「ねぶそくだと思うのよ。あしたはきっとおきられると思うわ」といいました。

ほたる取り

南克尚

夕方、うすぐらくなって、
ほたる取りにいった。
「ほう、ほう、ほたるこい」
「ほう、ほう、ほたるこい」
よびながら、草むらをかきまわした。
ほたるが光った。
ぼくは、そっとちかよった。
ほたるのちょうちんが、また光った。
ほたるをかごに入れてやった。
草も入れてやった。
かごの中のほたるは、
友だちをよんでいる。
また、ぼくはつかまえた。
二ひきのほたるは、
かごの中で仲よく光っている。

たこあげ

石渡利一

一月の一日に、ぼくは学校から帰って、ごはんをたべてからたこをあっちゃんと一しょに買いに行きました。ぼくは百円のたこを買いました。そして、うちに帰ってからたこをあげようとしたら、かぜがないので、たこはあがりませんでした。しかたがないので、しまっておきました。そして夕方になってから、風がでてきたので、あげました。百円のたこなので、すごく力がつよくて、ひっぱられそうになってしまいました。そして、しばらくあげていると、上の方の糸が、ぷつんときれてしまいました。糸がきれたので、いそいでおいかけました。おいかけているうちに、松の木にひっかかってしまいました。松の木にひっかかったのであきらめてしまいましたそれからしばらくたって、百円のたこをとばしたので、長い竹ざおを持っていってとろうとすると、さっきひっかかったぼくのたこがないので、山の上にのぼってさがしました。そして、さがしているうちに、下にあったみじかい木にひっかかっていました。ひっかかっていたのでとりました。それから、つぎの日またあげました。そ

のつぎの日には、前の日よりもずっと風がすごいので、たこはぐんぐんとよくあがりました。しばらくあげていて、たこをおろそうとして糸をまいていると、その糸まきがすべって、とんでいってしまいました。すぐ自転車でおいかけました。すると、糸がじょう水じょうの屋根の上にひっかかってしまいました。すぐ、糸をかわらからとって、糸まきにまきました。そうして、自転車で家に帰って、たこをしまっておきました。

つばめ

安達圭子

つばめがすいすいとんでいく。
どこへ行くんだろう。
見ていると、
となりのうちののき下にはいっていった。
こつばめをうむんだな、
と思っていると、
チイ、チイ、となく声がした。
見ていると、何だかとってみたくなる。
ずっとたっていると、
だんだん、足がいたくなって来た。

ヘリコプターとひこうき

荒井恵子

ブルルン、ブルルン、ヘリコプター
高いお空にとんでいる。
どこまでとんでいくのかな。
のろい、のろいヘリコプター
どこかにとまったら、いいのにな。

むこうからひこうきがとんできた。
どっちが大きいのかな。
とまってくれたらいいのになあ。
ヘリコプターをぬかすのかな。
だんだんみえなくなってきた。
「さよなら、」と手をふった。

わたしのいもうと

吉岡泰子

順子は、やっとよちよち歩くので、わたしはかわいくてたまりません。わたしが学校から帰ると、飛びついて来るから、よけいにかわいくなります。よくおにいさんが「めっ」とおこると自分の手を見ながらつねります。この間わたしの勉強のちょうめんをやぶいたから、おころうとして順子の顔を見たら、いい顔をしているので、やっぱりかわいくてわたしにはおこれないのです。わたしやおにいさんがわるいことをすると、棒を持って来て二人の頭をたたきます。わたしたちが何かわるいことを教えると、すぐにまねをします。だからおかあさんにおこられてじまいます。ごはんのときおかあさんに「おやかんを持って来てちょうだい」といわれてなかなか持って来ないと、「大きくなると順子がまねをしますよ」といわれるので、しなければなりません。ほんとうなら、おにいさんがすればよいのに「いもうとはおにいさんのいうことをきくのだ」なんていうから、わたしばかりがやらなければなりません。「順子行っておいで」というとおとうさんにおこられてしまいます。わたしがわるいことをするとおとうさんにおこられるので、順子がするとき、「おこりな、おこりな」というけれど順子ならばおとうさんはおこりません。
　だけど順子はほんとうにかわいいです。

節分

竹内陽子

　だんだん暗くなって来ました。きょうは、節分です。おかあさんが、「まめを買っていらっしゃい」といいました。わたしは、「はい。」といって、お金をもらいました。ふみきりの所まで、行くと、かねがカンカンとなっていました。そこでとまると、電車が、ゴーと通って、行きました。その音は、まるできょうは節分ですよ、という声のように、まめがころがっている音と、同じようです。まもなく電車は通って、しゃだん機はあきました。三角さんの家に行くと、もうたくさんの人が来ていました。ふつうのまめと、おさとうがたくさんついているまめと、どちらがいいかしらと考えました。みんなでまめをまいてから、食べるからおさとうがついているのを買いました。家へ帰ると、もうまっ暗になっていました。わたしは「おかあさん買ってきたわよ。」といいました。おかあさんが、「そう。じゃあ下へ行ってまっていらっしゃい。」といいました。下へ行くと、あいかわらず、あらいさんとやすゆきちゃんが、テレビを見ています。
　今オテナの塔のまっ最中です。わたしが、「あらいさんまめをまかない。」と聞いたら、「いや。」と、いったのでわたしが、一人でまきました。「おには外、ふくは内。」と、大きな声でまきました。よその家でもまめを、まいています。その声

は、よその家々にこだまして、高くひびいています。そしたら、はるきちゃんが、おにのお面をかぶって、拾って、たべています。

わたしが、「はるきちゃんのくいしんぼう。」といったら、「ねえちゃんだって、くいしんぼうのねぼすけ。」と、いったので、「どうしてなの。」と、聞いたら、「ねえちゃんは、ねがつくから、ねぼすけだい。」と、いったので、みんな大わらいをしました。

まめをまく音が合唱のようです。おかあさんが「やすきゃちんこんどから、はるきちゃんがようち園に行くからなかよくしてね。」と、いいました。おとうさんも、「陽子も早くよしおばさんにおいつくようにたくさんべんきょうするんだな、十八だんになるまでによしおばさんにおいついたらごほうびに本を買ってやる。」といいました。節分はたのしいものだと思いました。

これからもどんどんいろいろなぎょうじがふえるとよいと思いました。

わたくしのいもうと

長谷川 静子

わたくしのいもうとは、直子という名前です。すえっ子でとてもあまったれです。

ことし、学校へ上がるのに、まだ何も知りません。しんたいけんさは二月二十日です。夜、ねるときもおかあさんはお店にいくので、わたくしがねかせてやります。おにかいに行くときもおんぶしてやります。わたくしは、この頃おんぶをするのがすきになりました。字もおしえてやりました。やっと、自分の名前がかけるようになりました。でも、かけない字があるのでお習字に行くことになりました。お習字に行くときも、わたくしといっしょに行きます。字のかきじゅんをおしえればかきます。でも、直子はべんきょうがきらいなので、いやいややるときもあります。このごろはいっしょうけんめいです。直子は、おしゃれなので口べにをつけるのは、わたくしよりもうまいです。おかあさんが、「学校とようちえんとどちらがいい。」ときくと、「学校の方がいい。」といいます。せいがとってもひくいので、おかあさんは「早くランドセルを買って、ランドセルをしょうれんしゅうをしなければだめね。」といいます。わたくしは、早く直子が学校に行くようになるといいと思います。第一小学校まで送ってやろうと思っています。すえっ子だけに皆がかわいがっています。

はつまいり

三戸 豊

一月一日の朝、ぼくはおかあさんと近所のおじさんと一しょに、ふじの大石寺にはつまいりにいきました。東京えきから、汽車にのって東海道を進んで行きました。汽車のまどから見ると、右に山、左に海が見えました。そして、ふじのみやえきでのりかえて、バスにのってバスの中で歌をうたいながらすすんで行くと、大石寺が見えて来ました。大石寺でおりました。おりて行くと、小さな川がありました。その川の水は、きれいにさらさらと流れていました。ぼくとおかあさんと、近所のおじさんと、中へ中へとすすんで行きました。そこにぼくたちのとまるお寺が見えて来ました。ぼくたちはそこに入っていきました。ぼくの知らないおじさんとごはんをたべました。食べ終って外に遊びに出て見ると、ふじ山が絵にかいたように見えました。そのうちに夕方になりました。その日は、お寺にとまりました。ぼくはそこにねました。目をさますと、朝になっていました。日れん上人のおはかや、色々なほう物を見物して、おひるごろバスにのって、パスの中で、おにいさん方が歌をうたいながら、ふじの宮につきました。汽車にのって東京えきに夕方五時半ごろつきました。ぼくは汽車でりょこうしたことがなかったので、とてもたのしかった。

けが

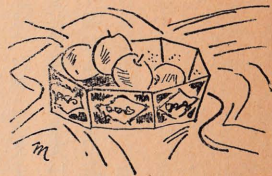
原田 幸子

左手の人さし指の先に、小さなとげがささっていたのを、おそうじが終ってから見つけて、そのときはいたくなかったので、いく日かわすれていますと、学校でお勉強中、指先がずきんずきんといたみましたが、勉強が終っておそうじのとき、また、わすれていたまなくなりました。帰りにまたいたくなったので、わたしは下をむいて強い風のふいて木の葉がとんでくる道をどんどんかけ出しました。おふろから上がってひどくいたむので、おとうさんに見せたら、「指先にうみがたまって、ひょうそうになりかけているようだ。」といいました。そのばんはおそいので、なかなかねむれなかったが、ゆめを見て休み、朝になってわたしはけががなおるのだと思って元気に病院に行きました。ドアーをあけるときは、足が進まなかったが、思いきってドアーをあけると、お医者さんや、かんごふさんの前でふしぎにおちつき、思ったよりしゅじゅつはみじかかった。それから毎日、病院に通ってかんごふさんが赤いくすりをつけないで黄色いくすりをつけるようになって、だんだんけがが直り、指のいたいのを忘れて、指を動かすので、ときどき、いたみ出します。

「早くなおればいいなあ」と思います。

四年

わたしの小犬

石渡良子

わたしの小犬はウオッチといいます。わたしが学校から帰ると、いつも、「ワン、ワンワン」とおもての方でほえています。まどをあけると、うれしそうにしっぽをふりながら、「キューキュー」とわたしの顔を見まわします。おかしがほしいのでしょう。わたしはおかあさんに、すこしおかしをもらってやりました。それから、かわらへつれていって、お水をのませました。ウオッチは、おいしそうにわたしのかおを見ながらのみます。のみおわるとわたしのかおへ、とびついてペロペロとふくや顔をなめます。そういうときには、だっこをしてやります。いつものように学校から帰るとウオッチのまわりには、だれもいないので、ウオッチがさびしそうにすわっていました。わたしが「ウオッチ、ウオッチ」とよぶとこちらにきたそうに「くんくんくん」とないています。でもつめたいくさりがついていて、こられません。わたしはいそいで、かばんをおろしてさんぽにつれて行きました。さんぽから帰ると、おかあさんが「近いうちにこの小犬をしんせきへあげてしまうからよくかわいがっておいてやりなさいね」といいました。わたしはびっくりして「あげるっていつあげるの。」というと「そうね、あしたか、あさってくると、はがきに書いてあったわ。」わたしはたまらなくなって「どうしてあげるの。もうあげるってきまっているの。」ときくと「あしたそうだんにきておとうさんがいいとおっしゃったらあげてしまうわよ。」とおかあさんがいいました。そのあくる日の朝おじさんがやってきてウオッチをはこの中へ入れてつれていってしまいました。わたしはさびしくなっておかあさんにウオッチが子を生んだらその子をもらってねというとおかあさんとおとうさんは「はははは、そんなにさびしいのか。」とわらいながらいいました。でも学校からかえってもウオッチの声はきこえません。

いもうとの順子

吉岡三郎

ぼくには二人のいもうとがいます。やす子はおてんばできらいです。下の順子は、やっとよちよち歩き出しました。ぼくが学校へ行くとき、バイバイと手をあげると、むこうも手をあげます。いつも学校へみんながいったあと一人で、おじいさんの所へ行っています。学校から帰ってきてこたつで本を読むといっしょになってよみます。まめをまいたとき、ぼくが年の数だけまめをひろうと、そのまめをよこせとねだって、なくのでぼくは、すぐやってひろいなおします。そのつぎの日、日曜だったのでこたつに入って勉強をしていると本やちょうめんをいたずらしてしようがありません。ぼくはすぐぶつと「わーん」と大きい声でなくので、またぶったなとみつかってすぐおこられます。ひるごはんのとき、ぼくはいつものようにくると、はしが一本みえません。またやったとかんしゃくをおこしてぶっておこられました。

雪

白水きみ子

チラチラ白い雪がふる、
お屋根も、お庭も、まっ白だ。
雪は、どこからふってくる、
雪の世界はどこにある。
サンタクロースのおじさんや、
雪ひめ様や、お星の住む、
天の国からふるのかな。
み上げる空は、はい色だ、
小犬の歩いた足あとが、
赤い実のなる南天の横を通って消えている。

アイススケート

大塚忠

日曜日なので、ぼくは、ゆっくりねていました。朝七時ごろにいさんが、「ターボウ行こう。」どこへと、ぼくは、いいました。あててごらんと、にいさんが、いったので、世界動物博覧会というと、「ちがう。」と、いったので、がっかりした。その次に「スケート。」と、いうと、「そう、だけど、ローラーかアイスか。」といいました。それは、ローラーなんか、にいさん、やらないから、アイスさ、「あたり。」と、にいさんが、いいました。「みろ。」とぼくが、いうと、「いいから、はやく、したくをしろ。」といったので、いそいで、おきました。八時半に、家を出ました。「新宿にいくの、後楽園どっち。」と、ぼくが、いうと、「最初はガマさんの、家に、行くんだよ。」ガマさんは、最初、ぼくが、住んで、いた、目黒にいます。目黒に、行くと、ぼくは、まえの友だちと、あそんでいました。すこしたって、にいさんが、出て来ました。ぼくはガマさんと、あにが二人、ぜんぶで、四人、いきました。最初は、ぜんぜん、すべれないので、にいさんに、つかまってもらって、すべっていました。そのうちに、すべれるようになったので、大きい方へ、いきました。けれども、みんなのように、うまくできません。それに、こんでいたので、また、ちいさい方で、すべりました。そのうち、にいさんが、ターボウ、帰ろ

う。」「うん。」と帰って、きました。家へ帰って、みんなにその話を、しました。

雪

佐久間二美

この間東京にはじめて雪がふった。ちょうど土よう日からふり続けていた。その翌々日学校へ行くと運動場いち面まっ白で、わたの世界にきたようだ。東京には雪があまりふらないのでみんな大よろこびだ。わたしも勉強どうぐを教室において外へ飛びだした。まっ白い雪の上を歩くと、ざっくざっくと音がする。なんだかなにも足あとのついていない所を歩くのが、もったいないようにおもわれる。勉強中も雪のことでおちついて勉強できなかった。やっと勉強が終った。つぎの時間は体育の時間だ。みんなわっといって外へ出た。雪がっせんをした。三年一組と四年一組が組になり、四年二組と三年二組になった。二組と一組もいっしょうけんめいにたまをぶつけたが、とうとう二組の方がまけてしまった。ほんとうにおもしろかった明日も雪がとけないといいなあとわたしは思った。

× × × × × × ×

うちのけい子ちゃん

折下弓子

うちのけい子ちゃんは、きょうもまだすっかりよくならないで、夕方になると、ねてしまいます。いつか、りきちおじちゃんが、絵をかいていると、「今は、なかなかちょうしがいいじゃないか。」という。おままごとをすると、「けいちゃんおかあさんよ。」というが、「ゆみちゃん、おかあさんじゃなくちゃしない。」というと、「じゃあ、けいちゃん、おねえさん」という。病気で、けい子ちゃんの方が、おもいとき、ねつが八度ちょっとあるのに、元気がよくて、大きな声でよぶのです。わたとえばよく、「本よんでえ。」と、すごい声でよびます。わたしが勉強しているとき、いたずらしてこまるので、「じゃ和子おばさんにいいつけて来る。」というと、「おかあちゃん、よんで来たらだめだ。」とおこります。仕方がないので、わたしが、「じゃ、いたずらしない。」というと、「いたずらするよ。」と、にくまれ口を言っては、いたずらするので、「いやぁ。」と、大きな声を出すと、和子おばちゃんが飛んで来て、「一度言ったらわかるでしょう。」と、おしりをたたかれるところや、「うえーん、うわーん。」とないているところを見てかわいそうに思った。わたしがあんな、大きな声を出さなければよかったなぁと思った。そして、こんどは、和子おばさんがにくらしくなってきてしまった。だが、すぐ思いなおして、わ

たしが、勉強が、じゃまされないように、してくれるのだと思うと、感謝の気持でいっぱいになった。こんど、いたずらしたら、やさしく注意してあげようと思っています。

もうすぐ春がくる

丹羽房子

きょうは日よう日だ。
おかあさんは、ぱんぱんと、
ふとんをほした。
とってもあったかい日だ。
「あっ、ちゅうりっぷのめが出た。」
「もうすぐ春ね。」とおかあさんにいうと、
「まだまだよ。」と、いった。
がっかりしながら前のはたけに行くと、
草のめがでてた。
うめの木に、
うぐいすがホーホケキョとないていた。
うめも、つぼみをいっぱいもって、
ふくらんでいた。
わたしは、うめも、うぐいすも、草も、花も、
みんな春を、待っていると、思った。

火事

井橋節子

わたしがねていると、ジャブジャブと、ちゃわんをあらう音がします。わたしは何かなと思って、起きて台所の方へ行ってみると、一番上のおねえさんでした。「まだねむったいんだからねてなさいよ。」といいました。お水をもらって、またねなおしました。わたしはまだねむかったのでとこへはいるとすぐまたねむってしまいました。しばらくたつとおねえさんが「おかあさん火事らしいわよ。」といいました。おかあさんはまだしらないらしく、ぐうぐうねています。わたしが「おかあちゃん火事らしいってさ。」と起してあげると、おかあさんは「だれが。」といいました。「礼子ちゃんが。」と教えてあげると「そうかな。」といいながら耳をすましました。わたしも耳をすましてみました。まだ夜中の三時ごろなので町もしんとしているのでよく聞えます。「ジャンジャンジャン」となり続きになっています。わたしは「おかあちゃんどのへんぐらいでどの家かね。」と、きくと、おかあさんは、「さあどのへんかねえ。」と答えました。「かわいそうだね。」と、おかあさんがいいました。おかあさんがもっくりと起きあがったので、わたしが「おかあちゃんどこかいくの」ときくと、「え、火事を見にいってくるのさ、節子は、まっていな、かぜをひくといけないからね。」と、おかあさんがいったので、わたしは、「う

ん。」と、いいました。となりのへやとわたしのねているさかいのふすまがあきました。だれかと思って見ると、三ばん目のおねえさんの京子ちゃんがねむそうな顔をして、「おかあさん火事だってさ。」といまごろいっています。「もうとっくにしっているよ、京子ちゃんがねている間に。」とわたしがいっている間におかあさんは着物をきていました。「そうそんならあたしいこう。」と、いいながら京子ちゃんも行こうかなというと、おかあさんが「だめだめかぜをひくといけないから。」といいました。礼子ちゃんがかけてきて、「おかあさんすごいよ空がまっかになっているわよ。」といいました。おかあさんは「そうかい、じゃちょっといってくるからね、しずかにねているんだよ。」といいながら家を出ていきました。京子ちゃんもすぐあとから行こうとしたので「京子ちゃん電気つけていって。」といってつけていってもらいました。家の中はおとうさんと二ばん目のおねえさん洋子ちゃんとにいちゃんの勉です。そのうちに京子ちゃんがかえってきて「すごいからあたし橋の道路で初江ちゃんとみてたのよ。」といいながら洋服をぬいでねていました。ようやく火事もおわったらしくおかあさんも着物をぬぎながら「節子ちゃんぜんぶまるやけだよ、いずみやさんとおかしやさんだとさ。」と洋服に着かえていた。またしょうぼう団のごはんをたきにいくそうだ。わたしはかわいそうでかわいそうでなりません。これからどこへすむのだろう。しょうぼう団がわるいんだ。はやくけせばけせたのに、全部もえないですんだのに。わたしはやけあとを見に行く気もしなかった。

雪

大野幹子

このごろは、空気が、かんそうしているがたいへんよい天気です。夜になると空にだんだんと黒い雲がうかんで来るので今にも雪か雨がふるような気がしてならない。ずっと前に一度雪がふった。わたしは、雪がっせんをするため、雪をだんだん積んでいってお城のようなものを作った。けれども、屋根がないのがざんねんでした。でも、おかあさんが「屋根を作ると、もし屋根がおちて来たらあぶないから作ってはだめですよ。」といった。そして、わたしたちは屋根をつけないで雪がっせんをした。そのつんだ雪は日がたっても、まだすこしのこっていたのでわたしは、おかあさんにいわれた。「そらごらんなさい、お城をつくるときはかたくしないで、そっと、作らないから、まだそこだけのこっているのよ。こんど作るときはね、そっと作るのですよ。」と、おかあさんがいった。わたしは「はい」と、いっておいたが、雪がふったら、もうしないことにした。一ばん雪のふるのは、二月にかけてたそうだ。だから、わたしは、もういちどふると、思っている。いつもの夜は、お星さまがでてきれいです。でもきのうの夜は、お星さまがでそうだけど出なかった。この前は、あねのお友だちが来たので、母とおふろにいった。おふろに行くとちゅう、雪の残りが、ところ、どころに、あった。

梅

岩城大太郎

冬はもうじき終りだ。
梅の木から、
ひょっこりめを出した。
冬はもう終りだと
知らせてくれる。
梅の花のめがぼくたちを見ている。
花のめも赤い顔をして
寒さに負けないようだ。
春が足音をしのばせて来て
寒さはもう終りだ。
梅もだんだんめを出すようだ。

こんな作文はよい作文です

へんしゅう部から

あなたは毎日の自分のまわりのことを、こまかく、注意ぶかく見たり、聞いたり、考えたりしているでしょうか。よく注意して見たり、聞いたりしてごらんなさい。あなたはきっと、不思議がったり、面白がったりすることと思います。考えて見ることもあると思います。それをそのまま、すなおに文にしてごらんなさい。それがよい作文なのです。それができたら、どうすれば上手に言いあらわせるか工夫してみて下さい。

　こんなよい作文を書くことによって、あなたの気持や、考え方、見方は、すばらしくすなおに、そして美しくなることでしょう。そうすればまた、よい作文もたくさんできることでしょう。

　それから、人の書いた作品もたくさんよむことです。そしてそれについていろいろと考えてみて下さい。こんな書き方や言いあらわし方はよいとか、こんなことはまずいとか、よい点、まずい点も、自分で見つけ出すことによって、あなたの見方や考え方が、どんなにすばらしくじょうたつすることでしょう。

あひる

山本豪太郎

ぼくの家の前に大きな池がある。そこにあひるが二わいる。このあひるはとてもなかよしで、いつもいっしょにならんでおよいでいる。ときどき岸にあがっている。そのときそっとそばに行くとおしりをふりながらにげて行く。冬になって氷がはってしまうと池の中にある小さな島にあがっている。ぼくはそれを見て、「およげなくてかわいそうだな。」と思った。この間向う岸をきれいな着物を着て歩いている人を見てがあがあからかっているようにしている。そのあひるの一わはとなりの高橋さんのあひるだそうだ。あひるがよく水の中に首をつっこんでさか立しているのを見る。これをそうがんきょうで見るとそのようすがとてもよく見える。この間雪がふった時などは、雪が白いのであひるが黒っぽいようだった。

きれの金魚

清水佐和子

この間、わたしはおかあさまと、いっしょにおふろにはいりました。

おふろのお湯は、ガラスのように、すきとおっていました。お湯の中にみかんのかわをつつんだきれが、楽しそうにおよいでいました。きんぎょのようでした。わたしのからだにふわふわと、尾をふってよって来ました。とてもくすぐったくてたまらないので、おゆを動かしたら、わたしのまわりをぐるぐるまわりだしました。なんだかいきているきんぎょのようでした。上にきたり下にもぐったりしながら、白い尾をふっておよいでいました。「ねえ、おかあさまこれなんだか、ほんとうのきんぎょのようよ。」「そう、あらほんとうにね。」とおっしゃいました。「でもこんな大きなきんぎょが、ほんとうにいたらどうでしょうね。」とおかあさまがおっしゃったとき、わたしはそばにおよいでいるきれのきんぎょがほんとうのきんぎょのように見えました。きんぎょがなんだかわたしを見てい　ようでした。「あっ。」とわたしは思ったとたん、そのきんぎょはもとのきれのきんぎょにもどっていました。「なーんだ。」と思って、そのきんぎょのあたまをそっとなぜました。

五年

もしぼくが大臣であったら

皆川満比麿

もし、ぼくが大臣であったら、日本の国民が住みよいように政治の方針をたてる。だいいち今の国会議員は、議会で国民のことを考えず、口ろんばっかりしているように感じられる。ぼくだったら日本からびんぼう人を、なくして、交通を便利にする。それから、子供を良く指導する。これは、今の大人はスイスの国みたいに、子供を良くみちびかなければ、子供そのものが、大人になっても、くりかえすばかり、そうすると、日本の国が、ますます悪い国民で一ぱいになるばかりだ。それに子供たちのあそぶ所をつくらなければだめだ。なにしろゆうえんちがあっても、よっぱらいがいて、大人たちがじゃまをするからそういうようなことをなくせば、日本の国が、世界から信用されて、もっとよい日本の国になると、ぼくは思う。

楽しい住みよい日本

塩沢春子

わたしは、この間、新聞で、東京都下砂川町米人き地反対、と、いう記事が、大きく出ていましたが、わたしは、その所を、目に通しただけで、別に、何も感じませんでした。あくる朝学校へ来ると、友だちが、「砂川町の人たち、かわいそうね」とか、「外国人て、ずいぶんね。」などと、話していました。わたしは、ふと、きのうのことを、思い出して、「あのことか。」と思い、その日は、早く家に帰って、すぐその新聞を見ました。わたしは、読んでいくうちに、砂川町の人がほんとうに、かわいそうで、また外国人のやり方が、とても、にくらしく思いました。日本の今の人口は、約八千万人で、それを、また、米人基地など、つくったら、それだけの、田や畑、人家、道路がますますせまくなってしまうと、わたしは、思います。日本と外国とは、もっとたがいに、仲良く何事も、話合いで決めて、楽しい住みよい日本にしたいと思います。

もしもぼくが大臣であったら

井元林造

もしもぼくが大臣であったら、日本の国のお金をなくしたい。それはどうしてかというと、お金があるとえらくなれたりできる時代だからだ。今の大臣の中にはほんとうにえらい人もいるが、たいてい国会でけんかする人が多い。えらくなれたりするお金などは、なくてもいい。そのかわり、ごはんを食べるときはお金がなくては食べられないから、いままではたらいた

仕事をそのまま続けてきゅうりょうのかわりに、定期を月ごとにもらうのだ。その定期で、ごはんを食べたり、電車にのったり、自動車にのったりするのだ。そうすれば会社などは、どんどん人をやとってこじきなどもいなくなるし、どろぼうもいなくなるからだ。外国とぼうえきするとき、お金がいるからだ。日本の国でょつうようしないお金をつくるのだ。世界各国がみんな一つの国になればなおいいと思う。

反省

熊田育郎

ぼくは、三学期になってから、今まで学級委員を、やってきたけれど、どうもぼくには、この仕事が、似わないらしい。気性が短気だし、人のめんどうを見るのが、へただからだ。音楽室などで、先生を待っている時、うるさくて、注意しても、きかないと、すぐ腹を立てて、時には、ぶってしまうことまである。そんなことがあるかと思うと、反対に、回りが、おもしろい話なんかしていると、自分まで、しゃべり出して、他の人に「なんだい、学級委員のくせに。」と、しかられるときも、たまたまある。こんな状態だから、「やっぱり学級委員は、えらいなあ。」と、いわれるようなことなんか、ぜんぜんしたことがない。ぼくが、委員になる前は、もし学級委員になったら、ああいうことをしたり、こんなことをしたり――なんて、考えていたけれど、もう、それを実行する自信も、なくし、「学級委員なんかいやだなあ。」なんて、思うことまである。でも、みんなが、ぼくを学級委員に、なるようにと、決めてくれたんだから学級委員らしい、あたりまえのことは、やりとおすつもりだ。しかしこの後、どんな失敗を、するかわからない。

けさのラジオ

小林晴

ガタガタという地震の音に目を覚ますと、もう七時過ぎでした。「そうそう。きょうは青戸さんが、ラジオに出る日だったわ。」と思って、起きました。少したってから、河井坊茶の声で、朝の童謡が始まりました。「最初は、青戸公子さんです」と声が聞えたとき、青戸さん上手に歌えるかしらと自分のことではないのに、何だか心配な気持でした。青戸さんは、小人の大工を歌いました。家ではおかあさんが御飯を作りながら、おとうさんは、顔を洗いながら、だまって聞きました。マイクを通す青戸さんの声は、いつもとちがっているようでした。大工さんの歌を歌ったので、「大工さんの道具をしっている。？」と質問されました。青戸さんが、「のみ。」と言ったのでアクセントのちがうことを注意されました。次は三年の今村千歌子ちゃんがポッポの郵便屋を歌いました。千歌ちゃんの声は、アルトのような声でした。千歌子ちゃんは、ラジオに出たのは、二回目なので、なれていました。一番終りは、三年の安達圭子さんでした。安達さんは森の笠をうたいました。「安達さんは何組？」「一組。」「千歌ちゃんと同じ組？」「同じ組じゃない。」「だって、分校と本校と分れてるから。」「どちらが分校で、どちらが本校？」「わたしが分校。」「それじゃ千歌子ちゃんが本校と分校とどっちがきれい？」「分校」「千歌ちゃん、安達さんはそういうけど、ほんと？」「ウフフ……」「だって、だって分校の方が新しいから。」

司会者と千歌子ちゃんと安達さんの問答でした。わたしが知っている人が出ると、なつかしいような気がしました。けさの童謡は狛江第一小学校の人たちばかりでした。

わたしの家

並木美恵子

わたしの家は七人家族です。

まず、おじいさん、おばあさん、おとうさん、おかあさん、わたし、いもうと二人です。わたしの家はわたしが三年のときの六月にここに来る前は阿佐ヶ谷にいたのですが、おじいさんとおばあさんが名古屋から越して来られるので阿佐ヶ谷のお家では狭いので、おじいさんがここにお家を建てて下さったのです。多摩川に近く、空気がよいのでわたしたちではよい所だと皆喜びました。けれどもおとうさんはお役所が遠くなって大変です。おとうさんは朝八時に家を出て夜七時ごろでないと帰ってこられません。おかあさんはわたしたちが出かけた後、一番下の英子をお守りしながら家の中をかたずけたり、わたしたちのめんどうを見て下さいます。おじいさんはもう年をとられたので会社へは時々いかれるだけで、後は英子を相手にしたりしていらっしゃいます。おばあさんもお裁縫をしたりしていらっしゃいます。ですから日曜日にわたしたちがおとうさんやおかあさんとハイキングに行ったり遊びに行くときはお留守番をして下さいます。一番下のいもうとは家中の人気者です。朝ご飯のときはまだねているのでなんとなく物たりないような気がします。わたしたちが学校へ出かけるころ廊下を、トントンとかけて出て来ます。その顔がまぶしそうでおかしいのでみんな「土の中から出て来たもぐらみたい。」と言うと、おねえちゃんなんかきらいと言っておこっているので、みんな大笑いをします。おかあさんはいもうとをだっこして門の所まで送って来て下さいます。いつも「気をつけてね、はな紙、ハンカチ持った？」とやさしく。おかあさんの手料理で、おじいさん、おばあさんと一しょに楽しいお祝もします。クリスマスやお正月にはわたしやいもうとたちと一しょにげきや歌を歌って一日皆で楽しく過します。

× × × × × × ×

水

長谷川　徹

人間は水がなければ生きていかれない。
ぼくは今たいへんなことを考えた。
もし水がなくなったらどうしよう。
今は、「原子力だ。」といっているが、もし水がなくなったら
原子力どころではない。
人間の体の何分のいくつは水分なのだ。
そのだいじな水がなくなったらたいへんだ。
雨もふらなければ、川もなくなる。
水面は水けがなくなりわれてしまう。
もしぼくが水だったら、
とそのときまで考えていたことがあわのように消えた。
それは水は、蒸発して、また雨になるということだ。
ぼくは、「ああよかった」と心の中で思った。
だがいつかはこの世界にそういう不幸なことが、おこるだろう
と考えると、またその不幸なとき生きていた人が、かわいそう
になってきた。
ぼくは今からでも、むだに水を使わないようにしようと思った

まんじゅうのゆくえ

斎藤　京子

出る人
- 五ろう
- おく様（五ろうの母）
- 女中のお花さん
- みよ子（五ろうのあね）
- その他

ぶたい　茶の間

左手に着物がかかり、その横にきょう台がおいてある。きょう台のはす前に丸いおぼん。

まくが開くと同時にとなりのへや、玄関から母と客の声。

母の声「まあまあ、これはわたくしの家の者、みんな大好物なんですのよ。すみませんねえ。まああがってお茶でもめしあがってらして。」

よその人「いえ、きょうは用事がありますから。またおじゃまします。」

母の声「そうですか。それではまた遊びにいらして下さいね。いつもすみませんわね。ではまた。」

そして左手から茶の間へ入る。

おく様「あら、お花はいないのかしら。」

お花をさがしながらさっきいただいた、おかしのはこをおぼんの上におく。それと入れちがいにわんぱくな五ろうが左手から入る。

五ろう「しめしめ、おかあさんはいっちゃったぞ。今のうち、今のうち……。」

そうっとおぼんの上のおかしのはこに手をのばす。ふたをあけると、おいしそうな肉まんじゅうが六つ入っている。すると左手の方から足音がする。

五ろう「お花が来るのかな。こりゃまずいぞ。」

いそいでふたをして、そこにつるしてあった着物のかげへかくれる。女中のお花がすみばこをもって左手から。

お花「おお寒い、寒い。さあさすみをついでおかないとまた、おく様にしかられるぞ。うんとにうちのおく様はうるさいからなあ。」

ぶつぶついいながらすみをつぎおわるとかがみの前へ。

お花「五郎おぼっちゃまは、おらの顔さえ見ればおかめおかめちゅう。」

かがみの前で百面そうをさかんにしている。

お花「おぼっちゃまはいたずらさえしなけりゃいい子なのに。おや、こりゃなんだべ。」

おぼんの上の肉まんじゅうのはこに目をつける。そっとふたをあけて、

お花「うわあ、うまそうな肉まんじゅう。おく様がわけてくれるまで、そっとしておいて。」

ふたをしめるとニヤニヤしながらすみばこをもって、左手へ入る。五ろうが着物のはじからかおを出し、おまんじゅうのはこに近づく。

五ろう「とんだじゃまをされちゃった。今のうちにこれごと持って。」

そのときまた足音がする。五ろうは、はこをおきまた着物のかげへ。おく様が左から。

おく様「さっきいただいたおまんじゅうをわけてあげましょうかね。お花や、ちょっといらっしゃい。」

お花「なんですかあ。おく様。」

おく様「おまんじゅうを分けてあげますからね。みよ子もよんできてちょうだい。」

お花「えっおまんじゅうですか、おく様。すぐよんで来ます。」

おく様「あ、ちょっとまってちょうだい。おさらもいっしょにもってきてほしいの。」

お花「はい、わかりました。」

左手へ入る。五ろう出ていけず、まだ着物のかげ。お花みよ子をつれて右手から。

おく様「みよ子、いままでなにしていたの。見えなかったようだけど。」

みよ子「さっきまでお友だちがいたの。こんどのお休みのことでちょっと。ないしょのこと。うふふ。」

おく様「ふうん。なんだかしらないけど、おもしろそうね。そういえば五ろうはどうしたかしら。」
みよ子「そういえば見えないようだけど。どこへ行ったのかしら。また野球かな。」
お花「ああ、五ろうおぼっちゃまでしたら、さっき野球の道具持って外へ出るの見ましたよ。」
おく様「そう。それならさいわい。いつも五ろうやおとうさんばかりたべているんだから、きょうは二つずつにしてしまいましょう。ほら六つあるでしょう。」
お花「うわあ、すごいですねえ。おらこんなことが毎日あるといいなあ。」
　おく様、みよ子わらい出す。五ろうはいまさら出ていけず、まだもじもじ。みんな、分けたおまんじゅうをたべ出す。
お花「おいしいですねえ。」
　おく様、みよ子、お花いろんなことを話しながらゆっくりたべる。そのとき、着物のかげでなにか分らない声がするのに気がつく。
おく様「今、だれか何かいわなかった。」
みよ子、お花「あらだれもなんとも言いませんよ。」
おく様「へんねえ耳のせいかしら。」
　そのとたん、五ろうのなきだす大きな声。
五ろう「わああんわあんわんわあん。」みんなびっくり。

——まく——

くせ

長峰邦武

世界のみんなに、くせがある。
みんなそれぞれのくせがある。
ぼくは、悪いくせの方が、多くありすぎるくらいだ。
プロレス、ちゃんばら、みんな学校で止められているものばかりだ。
ぼくは、悪いくせは、すぐおぼえてしまう。
よいものは、すぐわすれて、しまう。
まったく、しようがない。
手のつけようがない。
いずれわかるときが来るだろう。

六年

朝

菅原節生

「行ってまいります。」元気よくさけぶと朝の空気をむね一ぱいにすいこんで学校に向かう大地をギュッとふみしめて歩く。冷たい風がスッとほほをかすめて飛び去って行った。実に気持がよい。口笛をふきながら先方を見つめて歩いた。「ワーワーッ」というにぎやかな声が、だんだん近づく。運動場へはいるとなんとなくあたたかい。ぼくは遊んでいる友人の中を通りぬけて教室に向かって走った。ふでばこの中みが、ガチャガチャとなった。「おはよう。」「おはよう。」教室にカバンをおくと、みんなそれぞれすきな遊びをする。「すもう」をしている人もあれば、あちらでは、「たぬきのしっぽ」でむちゅうになっている。またみんなで「かくれんぼ」もする。ぼんやりつったっている人などほとんどいない。（ウー）朝の大空にわが学校のサイレンがひびきわたった。スピーカーからは明かるいラジオたいそうの音楽が流れ出て来た。ぼくたちは音楽に合わせて元気一ぱいたいそうをした。

卒業を間近にして

真田昭三

六年という年月も過ぎ去ってしまえばゆめのようである。母に連れられて桜の花さく校門をくぐったこともはっきりとおぼえている。一年のときから二年三年とやさしい渡辺先生に習ったこと、なつかしく思い出します。いつまでもいつまでもきっと忘れることはないでしょう。

四年生のときから壁先生に教えてもらうことになった。そして五年生六年生とお世話になった。みんな先生の言うことをきいてよく勉強した。そして先生方の御指導のおかげで無事卒業させていただけることを深く感謝しています。中学へ入っても一生けん命に勉強して世の中に役立つような人間になりたい。母がいつも言うように美しい心を持った人間になりたいと思います。手をとって教えてくださった先生に仲よく学び遊んだ友だち、雪のふる日も雨風の日もあたたかく楽しかった小学生活を卒業して、人生の第一歩、中学生としての第一歩、自覚して勉強する第一歩を踏出するのだ。しっかりやるのだ、ぼくは自分のむねにこうよびかける。

×　×　×　×　×　×

わたしの日記から

谷島三恵

十二月二十五日。きょうは、最初の冬休みだ。クリスマスなのでケーキやごちそうを食べた。おにいさんが、お酒を買ってきた。わたしもオチョコに三ばい飲んだ。もっと飲みたかった、でもおかあさんが、「まだあんたはこれから勉強するのだからそんなにのんではいけない。」と、いわれた。それでも、のみたかった。わたしは何度もお酒のびんをあけてにおいをかいでみた。なんともいえない、いいにおいだ。プレゼントをおにいさんやおねえさんからいただいた。わたしはお金がないので、きれなどで何か作ることに決まっていた。十一月ごろからいっしょうけん命作った。おかあさんには、お弁当入、おねえさんには、はんかちにししゅうをし、おにいさんには土人の人形を作って上げた。箱を開いて見たとき土人はおにいさんの顔によくにていたのでけっさくだと言って、みんなで大わらいしてしまった。

十二月二十八日。こないだお百姓さんにたのんだ、おもちが届いた。おにいさんとわたしとおもちを切った。夕方になったので、さっそく、おぞうにをつくった。わたしがおもちを焼く役目だ。キツネ色にじょうずに焼けた。おもちの上をぽんとおすと、プーとふくれる。おもしろいので何度もやってみた。

十二月三十日。わたしがおかあさんに頭の毛を切っていただいた。みじかく切った。おまけにマンボのようなズボンをはいていたので、おにいさんや、おねえさんがわたしのことを「マンボマンボ。」と、言うのです。わたしはくやしくってたまらなかった。そこでおねえさんに、あだなを付けた。おねえさんは、カサギシズコ、のように口が大きい。カサギはブギウギと歌うので「ブギウギ。」というあだなを付けて二人で言い合いをした。でもなんだか、ブギウギよりマンボの方が言いよいので、そのことを一家の人に話してみるとみんなで大わらいをした。

一月一日。きょうはお正月だ。お正月そうそう、朝おかあさんとおねえさんとけんかをした。原因はわすれてしまったけどわたしはおかあさんに味方する。おねえさんは心に思ったこと、何でもずばずば言ってしまうからだ。おかあさんの子供だから、おねえさんも気が強い。もちろん、おかあさんは気が強い。だから二人は、いつも気が合わない。

正月そうそうけんかをした。

一年の計は元旦にあり。と言うことわざがあるくらいだからこの一年、けんかばかりしているのか、と思うと、何だか情なくなる。

でも、心をひきしめてかかろう。

利己主義と個人主義

白水登義子

利己主義、個人主義などという言葉をつかうとなにかものすごくえらい、わたしたちとは、えんのない言葉の様に聞えるがこの意味は、だれでもしっている、みているやさしい言葉なのだ。わたしは、こういう人に時々あったことがある。自分一人の幸福のため他人をすて、自分の損得のことについては目の色を変え他の人をおとし入れる。他人をかわいがる親切という心のゆとりはなくなってしまう。地球の人間生活としておそろしいことだ。考えて見ればなんと日本の国には、利己主義者の多いしょうこだ。そのため多勢の人をおびやかせ、心配させる。悪い事をした人の中にも生活上、苦しくて考えて考えたあげくの行いであろう。でも自分がいくら苦しくても、自分一人が悪い事をすると、多勢の人がこまる。だからやめようと考えるべきだ。だれでも良心はあるのだ、きっと心の中に利己主義の心個人主義の心とが住んでいて、両方が戦って個人主義の心が負けてしまって利己主義の心がその人を悪い道へと動かしたにちがいない。だからわたしは悪い心に負けない強い意志を持ちたい。家でも一人の利己主義者がいると家はみだれ、いやな生活を送るであろう。いや団体生活でなくとも一人一人がそういう心をもっと全体が悪くなり統一できなくなり、暗い、つまらない生活を送るであろう。

わたしはある日こんないやな情景を見てしまった。それは車内の出来事だった。ちょうど勤めから帰る人たちで電車はこんでいた。五十才ぐらいの男の人が座席にすわりまたを大きく開いて二人分ぐらいとっていた。しばらく行くとドアが開き女の人と子供が乗って来た。そして、その人の前にちょうど立止って女の人がもうすこしつめて下さいというと、うるさそうに、イヤな顔をして最初はグズグズしていたがしかたなさそうに立ち去ってしまった。かと思えば荷物を座席にならべたり、どたぐつでむやみに人の足をふんだり、人のこまるようなことをする人が数えきれないほどに日本の国にいる、かなしいことだ。それほど利己主義者があっちにも、こっちにも、ごじゃごじゃ住んでいる。ぼくぐらい、わたし、一人ぐらいなら悪いことをしてもだいじょうぶだろうとだれだって考えていると、それが大きくなり国を「じゃ」への道へと進むもとなのだ。また個人主義は一人一人の人間をどこまでも大切にしなければならないという考え、その立場から物ごとを判断したり行動したりする。こういう心の持主ばかりなら世の中はきっとまるく円満におさまるだろう。新聞やラジオは悪い犯罪ばかりでない。よいことを行ったこともたくさん出ている。こういう行いをした人たちはみな自分の幸福より、人の幸福を念願して行動した人たちだろう。わたしはこんな記事を読むと日本の国の悪かった部分がすこしずつよくなるようで、心の底から自分のことのようほんとうにうれしく思う。そしてほんとうに神聖な心のその人たちに感謝の気持で頭がさがる。学校生活、遊びみな利己主義

ではいけない。それに利己主義のりくつの通る所はないはずだ。

ほんとうに個人主義でなくては、自分を大事にまた自分と共に他の人を尊重し自分の自由を主張し他人の自由を認める。これがほんとうの個人落入れではいけないのだ。自分一人が幸福になろうと自分かってなわがままを思っている、その前に他の人のことを考え利己主義者をなくし利己主義という言葉をなくす。みなこういう考えをすればそれが直接日本の国をよくし、ついには世界が争のない平和になり「きく」の花のように美しいなんのいやみもない清らかな地球になるだろう。わたしたちの心次第で利己主義者のいる悪い国にもなり個人主義者のいる富と文化の栄えるよい国になるのだ。利己主義をこの地球上から完全にぜんめつさせるのだ。何人かの個人主義者がいればきっとみなその人のまねをし、かならずよい国になるとわたしはそうしんじている。

原子力の記事を見て

安達伸雄

ぼくは、近頃よく原子力のことについて書いた記事を見る。その内容はとってもむずかしい。それでもその方に心が移るのである。

最初のうちは、どうして米、ソなどにウラニュームがあって日本にはないのだろうと思ったこともあった。でも、記事をよんでいるうちに、どうやら日本にもウラニュームがあるらしいということが分って来た。

そして今年度も地質調査をするそうだ。東北、九州地方に重点を置いているるそうだ。原子力委員会もできた。五年後には原子力発電も出来るという。しかし、米、英、ソなどには、はるかにおくれている。早くこの国々に追いついてもらいたいものだとよく思う。ぼくも大きくなったら、原子力を大いに利用して世界の平和に役立つ物を作りたいとふとんの中で思うことがある。

禿鷲の爪をよんで

金子美都子

わたしは最近禿鷲の爪という本を読んだ。それは、南米の大草原をぶたいにはしりひろげられている豪壮雄大な熱血冒険小説である。わたしはこれを読み、今でもこんな所があるのかと思った。それは汽車も通らず馬が第一の乗物だという。その巨大なパンパにはスイスからわたって来た人たちが牧場を作っているだけである。そこに働いている牧夫たちにとっては鉄砲がなによりの武器なので。パンパにはけいさつの力がおよばないのであるという。わたしが感心したのは、そのパンパにいるカーチスたちは、仲まが危険なときはそれを命がけで助け、また電車も何もない所でもその通信というものはとても早く、仲間ではないこんけつじなどにはそれを絶対にもらさないということである。本のだいの禿鷲の爪というのは、パンパをあらす禿鷲という悪者とスイス人と日本人の間に生まれたふじ夫少年とバワボというカーチスやその仲間が力を合せてその禿鷲国をうち父や母のかたきをはらすということ。

ぼくらの六ヶ年小史

金山敦

第一学年（一九五〇）

◇四月一日に初めて小学生になる。先生は、ちょっとふとっている松原先生。

◇五月、はじめての母の日の運動会

第二学年（一九五一）

◇五月、小田急、山手　で上野動物園に遠足。

◇一学期の終り頃、〇〇君ががん張りだした。卒業したら別々になるので、今になってほほえみたくなる。

第三学年（一九五二）

◇新学期から学級主任が新しく学芸大学を卒業された高松先生にかわった。先生はぼくたちがさわぐと、教室から出ていかれることもあった。今、先生は、武蔵野の本宿小学校に居られる。

◇十月、狛江第一小学校の創立八十周年の記念の式や、お祝の行事があった。卒業生も大分多いことだろう、歴史のある学校だ。

第四学年（一九五三

◇夏休みが終る頃から、何となく映画を見るようになった。

◇夏の和泉のお祭りで、刀を買って、石井君たちとちゃんばらをした。学校ではできなかった。

◇高松先生を送った。二年間、いろいろと教えてもらった。運動を一緒にして下さった元気な先生だった。

第五学年（一九五四）

◇高松先生の後に淵上先生が学級主任になった。初めての男の先生だ。社会科をよく研究しておられると聞いていた。

◇臨海学校で伊豆多賀に行った。ぼくは班長になった。特異なグループだとされていろいろ世話をかけた。

◇鎌倉遠足で有名な大仏を見た。歴史の勉強が、どんどん好きになっていった。

◇「よくさわぐぞ」と、何度もお説教がまわった。とに円、腕自まん組として有名になった。

第六学年

◇春の遠足は、これまでとちがって徒歩中心の遠足になり、多摩霊園にあそんだ。足にまめができた。

◇六年になると、学校の役員などになってうれしい。ちょっと強くなったみたいだ。

◇一学期の終り頃から、日光修学旅行の話がにぎわい、思い出の日光旅行がなされた。

◇秋の運動会も最後のものとなり、好天気の中で大いに走った

◇学校の球ぎ大会や男子、野球に優勝。夕方近く、拍手の中で優勝した感激は忘れられない。

◇一月、雪合戦、淵上先生、女子組対男子組で行こう。校舎の板を破って、床下にかくれて先生の攻撃をのがれたっけ。今そのこわれた所は、新しい板でふさがれている。

◇委員の立候補。演説して選挙の結果、週番になる。

◇学芸会で、六年代表の劇の主役になる。

◇中学校の試験もすみ、狛江から三十名位、よその中学に進学するそうだ。卒業記念にアルバムをいただいたら、もうすぐ卒業だ。

◇卒業文集「いずみ」の原稿を書く。

「すずめの生活」を読んで

風間克美

「すずめの生活」というのは六年の教科書に出ていた。なかなか面白い文であった。

すずめの胴は真白です。光沢があって、やわらかな、その純白の胸毛、まったくぼくは、これを着て大空を飛びたいものだと考えた。

すずめは、ときたましぶ茶色の大きなしっぽの先が強く内側にそり曲る。そして純白な胸毛を一つひっぱたくと、すぐにちゅう返り、なんとかわいらしいことであろう。このすずめの生活はだんだん冬に変っていく。そのときにとっても面白いことをやるんだ。すずめが地面におりてちょんちょんと歩く。そのときのあしのかっこうは、その両方がそっぽうに開いている。生活が冬に入って古池に厚い氷が張りつめる。ある朝すずめが小さな足で気どって身をそらす。面白い表わし方である。

卒業を間近にして

林邦子

わたしたちはもうじき、この狛江第一小学校を卒業するのだ。この間一年にあがったと思えば、あと一ヵ月でわが母校をあとに、それぞれ他の学校へ行くのだ。

一年から六年まで長いようでとてもみじかかった。わたしたちが入学して初めて遠足に行ったことは一生忘れることができないだろう。あのとき、わたしのつきそいに行ってくれたのはおかあさんと、今三年になるおとうとだ。そのとき、わたしとおとうととビックリハウスに乗った。おとうとは急にいすが廻り出して天井が下にいったり、下の床が上にいくように見えたので泣き出してしまった。外へ出ると、母が「どうしたの。」とそばへ来てその涙をふいた。わたしが今のことを話すと、「ばかねえ、だからそんなものに乗るんじゃないのよ。」と言った。それから気晴しにいろいろなものに乗って遊んだ。そしていく月か過ぎて秋の運動会、あのときの玉入れ競争が今でも忘れられない。その年もくれて、翌年の学芸会。わたしは何に出たか覚えていない。そのようなことを何度かくりかえしている

中にも六年、まして来月は卒業だ。何だか名残り惜しくて、もう一年ぐらい、いたい気持だ。

わたしは中学でも一生けんめい勉強し、高校に入り、父や母をよろこばすような立派な、よい人になりたいと思う。

今年度学校であった出来ごと

四月　五日　始業式と入学式があった。
　　　九日　分校ができあがった。
　　　十八日　年度はじめの身体検査。
　　　二六日　四年生以上、聖蹟桜ケ丘に遠足。
五月　二日　一年生から三年生まで、京王閣に遠足。
　　　八日　母の日の運動会。
　　　一九日　よい子のつどい。
六月　十日　時の記念日。
七月二一日　伊豆多賀臨海訓練。
十月二一日　から、一年、井の頭公園へ。二年動物園へ。三年、村山貯水池へ。四年高尾山へ。五年、鎌倉へ。六年、東京港へ。
九月一九日・二〇日　校内展覧会。
十一月　四日　校内球技大会。
　　　八日　よい子のつどい（日比谷公会堂で）
　　　二六日　北多摩郡児童作品展に出品。
　　　三〇日　人形劇の鑑賞。
一月二一日　学芸会中央大会が兼松講堂で。
三月　一日　学芸会。
　　　二日
　　　二三日　卒業式。
　　　二四日　修業式。

編集後記

○今年度も終りに近ずきました。先生方で相談をして、わたしたちの文集を作ることにしました。名前は、わたしたちの町の名にちなんで、「いずみ」としました。どうですか？

　第一号なので、いろいろとまずい点や、いけないところもたくさんあると思うんです。それらは、これからのもんだいにしたいと思います。

○大勢のお友だちの作品が、たくさんのせられる文集でありたいと願っていましたが、ページ数（予算）などの上から、それができなかったことは、ほんとうに残念ですが、でも、この「いずみ」にある作品は、みんな明るくてすくすくとしています。わたしたち、みんなのほんとうの姿なんです。

　正しいもの、真実をもとめていく元気なわたしたちの姿なんです。大切なものは、どんな小さなものでも見のがさないで研究していく、それがわたしたちの生活をよくしていくものです。それが、わたしたちの詩であり、日記であり、作文や記録文なのです。

○あなたが、悲しくなったとき、いやになったとき、あなたの話し相手として、この「いずみ」を見て下さい。きっとあなたをはげましてくれることでしょう。どうか、仲のよいお友だちとしてこれからこの「いずみ」を育てていって下さい。

○これから、この「いずみ」が、すこやかに成長していくことを、皆さんと共にたのしみながら……。

いずみ　第一号　（非売品）

昭和三十一年三月　十日編集
昭和三十一年三月廿二日発行

編集　狛江第一小学校　国語研究部
発行　狛江第一小学校長　高橋義彦
印刷　荒川区日暮里町二ノ一二九　帝都印刷株式会社　電話(89)〇九五三番